

【日本語訳】

相互評価報告書

ウースター大学学長 グラント・コーンウェル

はじめに

ICUから諮問を受けたのは今回が2度目である。前回は2005年、ウィリアム・スチール教養学部長の招きで、教学・組織改革に本格的に取り組み始めたICUを訪問した。今回は教学改革本部長日比谷潤子学務副学長の招きによるもので、教学改革を評価し、進捗状況を考察し、また課題を指摘することが目的である。

主題1： 教学改革

2006年4月に教授会が教養学部教学改革案を承認し、教養学部の6学科はアーツサイエンス科に統合されそれぞれがメジャーを擁する専門分野別16デパートメント制に移行した。この新組織は下記に詳述する新教育課程の基礎を担っており、国際的なリベラルアーツ大学であるICUの使命をより適切に反映し支える構造となった。

多くの大学が変化に抵抗する傾向が強い中で、果敢に抜本的な改革を遂行した教職員の先見性と改革を受け入れた心の広さに敬意を表す。改革断行は、強力なリーダーシップの功績によるところが大きい。

以下の3分野では継続的な配慮が望まれる。

改革前の6学科長に相当する役職は16のデパートメント長となった。大学では概して役職就任に伴う責務が教員本来の役割である教育・研究に割く時間を奪いがちである。新組織によって教学プログラム運営がより官僚的もしくは負担のあるものにならないよう注意すべきである。

新組織では教員同士が議論する基本単位の構成が専門分野的に狭まり人数も絞られている。改革前は専門分野が異なる教員が学科内で意見をまとめていたが、現行のデパートメント制では専門を同じくする教員で構成されており、専門分野・カリキュラム・適切な教授法に関する意見がまとめやすくなっている。ただ逆に専門分野に偏った見方を奨励する可能性もあり、ICUのリベラルアーツの使命と矛盾するリスクを伴う。

また同僚間で財源などを分かち合う際に、改革前は6学科で分割していたものを16デパートメントで取り合うことになるので、この分配過程が包括的で透明性が確保されることが肝要である。

上記は周到な経営体制で適切に管理することが可能で、この点については問題がないと自信を持っている。教員組織再編を心から支持する立場から、問題が生ずる可能性のある分野を指摘したままである。

主題2： カリキュラム

教学改革で最も前進した点はカリキュラム改訂によって履修の選択肢が広がったことである。ICUが米国で一般的なりベラルアーツ・カリキュラムへのアプローチを採用したことで、学生がすべての学

間分野を広く探究することを奨励し、各自が学問分野を関連付けて理解し、自身の興味と得意分野をはっきりさせた後に専攻を選択することができようになったことは大きな前進と評価すべきである。

在学生と志願者は改革を高く評価している。志願者は増加傾向にあり、学生は新教育課程が選択肢を広め、自身を見つめる機会を与えることを志望動機にあげている。新カリキュラムはICUの使命に合致し、他大学との差を際立たせるであろう。

新カリキュラムへの移行に伴い注意すべきは2点である。

まず各デパートメントは、担当する科目を履修する学生を2つのタイプで考える必要がある。すでに知識を持っており専攻分野として取りあげる用意がある者とまだ模索中の者である。入門レベルでの教育が最も難しい。専門分野の視野を広げようとする学生と専門分野の基礎を築くことを目的として履修する学生の双方に1つの科目で対応しなければならないからである。

第2に、探究は発見へと導かれることが多いものの、時には迷子になったり混乱する学生も出てくる。履修目的の明確化は強要されるべきものではなく、方向を見失った学生にも十分な配慮が必要である。ICUは下記に述べるように、この点についても行き届いた配慮をしている。

主題3： アカデミック・プランニング

特に画期的なのがアカデミック・プランニング・プログラムの導入である。新カリキュラムを支える強力なプログラムとして設定されており、学生のリベラルな学習探究を構造化している。学生があてもなく迷うことがないように、目的を明確化し計画的履修へと誘導する。このプログラムを支える先見性と知性は非常に印象的で、間違いなく国際的にも先駆的な試みと言えるであろう。

特筆すべきは以下の2点である。

まずアカデミック・プランニングのプラットフォームとしてとして開発されたe-ポートフォリオは素晴らしく、国際的にも評価されるべきモデルである。目的達成の最適手段として開発担当者のリーダーシップに敬意を払う。アカデミック・プランニング・エッセーも非常によく機能しており、学生の目的の明確化とアドバイザーとの連携促進につながるであろう。

E-ポートフォリオで1つ気になる点がある。ICU独自のプラットフォーム開発は当面の必要性を満たすものではあるが、将来的には必ず履修登録・聴講システム、学位授与制度との連携を持たせることが必要となってくる。アドバイザーと学生がコース日程、成績表、教材、アカデミック・プランニング・エッセーと連携しながら使用できることが必要となるだろう。独自のシステムで連携を持たせることは難しい。

第2に、アカデミック・プランニング・ハンドブックも優れている。ミッションステートメントや学習目標を明確にすることで、学生の探究目的明確化を支えている。

主題4： 評価の新制度導入とアカウントビリティ

この10年、米国の高等教育評価機関はもっぱら結果評価や他の厳格な説明責任指標開発に専心してきた。この動きは原始的な介入や無骨な手段から始まった。10年間の大学・評価機関連携で評価と説明責任への関心は益々高まっており、より精巧で洗練された方法で行われている。

ICU が教育結果評価システムを率先して構築すれば、この分野では日本のリーダーたりうる。固有の使命追求という純粋な動機から派生した評価が上手に遂行されれば継続的な革新を導くことができる。

近年の改革で基礎的な教育結果評価プログラムの土台を築き上げた ICU は前途有望である。問題は、大学としての使命を果たした上で ICU 生が卒業しているか、である。これをどうやって評価するか？その根拠は？最も顕著な成果は？弱点は？

これらの質問に答えるために以下の 2 点を勧める。

第 1 に、各デパートメントは卒業論文評価基準を決め、ここ数年提出された卒論についてデパートメントが設定したメジャーの学習目標達成度を評価する。第 2 にアカデミック・プランニング・プログラムによって e-ポートフォリオ評価基準を設定し、恣意性と目標の明確化を評価する。加えて各学生は卒業前の最終課題として ICU の使命をどの程度果たせたかをエッセーに書き、ICU が掲げる学習目標達成の具体例を挙げる。

これを実行することで確実に日本での評価の先駆者になりうる。加えて高等教育機関同士の競争が激化する中で、卓抜した教育機関としての学習目標と重要な使命の達成を言葉だけでなく裏付ける証拠も提示することが可能になり、ICU は競争力を強化できる。

主題 5:リベラルアーツ的理科教育

米国のリベラルアーツ大学では自然科学についての探求型教育が明白な効果をあげている。学生が最初から探究に従事し科学の方法論と問題解決法を学ぶ研究を基礎におくアプローチである。

今回の教学改革で理科教育を行う ICU の教員が米国でのリベラルアーツ的理科教育の動向を取り入れることができれば、ICU は日本の理科学部教育の先駆者となりうる。ICU 教員、学生、そして大学自体にとって得るものは大きい。道は険しくかなりの投資を必要とするが確固たる意思で粘り強く追求することができれば理系国立大志望の学生をも引きつけることが出来るであろう。学生獲得競争において差別化を図る有利な条件となる。

そのためには、ICU とウースター大学の教職員がリベラルアーツに則った理科教育で協力することを推奨したい。ウースター大学はこの分野では米国でも先駆的存在で、理系専攻卒業生で博士号を取得する割合が高い。最近では US News and World Report がウースター大学をその教育の質の高さから米国リベラルアーツ大学のベスト 10 の 1 つとしてあげているが、これは学部教育の先進性と理科教育の成果に他ならない。ウースター大学と ICU は国際協力への使命を共有しており、協力を模索することは互いの利益に資すると思われる。

結論

ICU は、果敢で先見性のあるリーダーシップを備え、すぐれた教育に専心する教員と優秀な学生からなる卓抜した大学である。明らかに上昇気流に乗っている。本報告書では、その長所を述べ、若干の課題に注意を喚起し、また前進を続けるために勢力を注ぐべき分野を指摘した。

以上